夢よもっとひろがれ

7

発行・編集
いぶき福祉会後援会
〒502-0907
岐阜市島新町５番９号
TEL.０５８-２３３-７４４５
FAX.０５８-２３２-９１４０
E-mail.ibuki@alto.ocn.ne.jp
（１部１００円）

第二いぶきなつまつり にぎやかに開催

もくじ

② 後援会総会報告
③ 施設見学会報告
④ ⑤ [シリーズ] 私と息子といぶきと
⑤ 東北被災地視察
⑥ 法人決算報告
⑦ 会員更新のお願い
⑧ ⑨ いぶきまつり報告
⑩ ⑪ いぶき仲間のすがた
⑫ ⑬ ⑭ ⑮ 座談会：親亡き後その２
⑯ 情報掲示板

この通信がお手元に届くのは梅雨明けした頃でしょうか。じめじめした期間が終わり、いよいよ夏本番です！今年の夏はとても暑くなりそうです。夏といえば、海・山・花火大会になつまつり・・・第二いぶきでは二年ぶりになつまつりを開催しました。なかまの笑顔がはじける〝アツい〟まつりとなりました。

IBUKI
2016 Spring
Vol.187

後援会総会報告

7月3日(日)日光コミュニティーセンター大集会室にて後援会総会が行われました。後援会員約70名の参加がありました。

総会では、2015年度の報告と2016年度の方針についての審議と議決がなされました。

昨年度は、一般会員(一口2000円)を1，000名、団体会員(一口10，000円)を30団体、募金ビン50箇所設置を目標に取り組み、一般会員846名(新規82名)、団体会員8団体(合計14口すべて新規)、募金ビン42箇所という成果がありました。後援会パンフレット、募金ビンを新しく作り変え、活用しながら取り組みました。

総会の後は、特別企画として、いぶき福祉会の仲間の活動報告として、第二いぶきの職員の澤井大輔さんから「りすのほっぺ」(ジャム)の報告と、きざはしの職員の加藤亮太さんから「いぶきファーム」(きざはしの農業グループ)の報告がありました。その後は、

数名のグループで「仲間たちの活動を支えるために後援会でできること」というテーマで話し合いました。話し合いの中では、後援会活動や仲間たちの活動について、地域との交流などについてなど様々な意見交換がされました。

後援会事務局長
原　哲治

いぶき福祉会 後援会員継続のお願い

2016年度いぶき福祉会後援会員の継続をよろしくお願いします。皆さまのご支援が、いぶきの仲間の豊かな生活を支える力になっていきます。

ぜひ、今年度も1人でも多くの方と一緒に後援会の活動を通して、いぶきの仲間の生活を支えていきたいと願っております。

会費更新の振込用紙を入れさせていただきました。どうぞよろしくお願いいたします。

施設見学会を行いました

本通信でもお知らしたとおり、6月8日（水）に後援会員向けの北部事業部の見学会を行いました。これは、日ごろお世話になっている後援会員の皆様に実際の様子を見ていただく機会を設けようと昨年から実施していて、前回の西部事業部の説明会に続くかたちで開催しました。当日は16名の方々にお越しいただき、北部事業部の概要説明の後に、第二いぶきとパストラルいぶきを見学していただきました。仲間たちが実際に仕事をしている場面とパストラルのハード部分を見ていただきました。時折質問もいただきながら、皆さまとても温かいまなざしで見学いただきました。

以下に参加いただきました方の感想を抜粋して掲載させていただきます。

○いつもおまつりやいぶきの商品などを見ておりましたが、実際に施設の中や仲間の皆さんの姿を拝見することができ、もっと身近に感じられました。こういう機会を設けていただきありがとうございました。

○10年ほど前、グループホーム等で働いていました。そのころと比べても、ノーマライゼーションの考え方や働く環境、住む環境への考え方は格段に進歩したんだなあと感慨深かったです。

「自分だったら、ここに住んでみたいか、みたくないか」「自分だったらこの賃金や環境で働いてみたいか、みたくないか」という視点は、当たり前のことでありますが、どうしても抜け落ちてしまいがちです。今日見せて頂いたこと、教えていただいたものは今後の自分自身の考え方にプラスにしていきたいと思います。本当にありがとうございました。

○職員の方々の表情がとても良いですね。さりげない連携がとても素晴らしいです。利用者の方にもその気持ちが伝わりゆったりされていました。グループホームのリビングが広くてうらやましいです。利用者の方がどんなふうに過ごされているのか興味があります。

○作業の流れ、利用者さんとのかかわりなど、何が大切なのかを考える機会ができました。グループホームは、全体的にゆったりとしていて、とても、良い感じがしました。

○自然の素材を生かしての製品づくりと、一人ひとりができる役割を大事にされていて、できた製品がかけがえのないものだと伝わりました。

○職員の方が一人ひとりの対応をしっかりされている印象です。ホームのことは悩みどころなので自分自身考えていかなければと改めて考えさせられました。いろいろな作業があっていいなと思いました。広い空間があるのが良いです。

○仲間の様子や職員の働く様子が見れてよかった。仲間の働く様子は一生懸命頑張っていて、職員がサポートしている様子がとても和みました。

○第二いぶきは以前いきなり団子を買いにきて以来で、昔テントをはって売っていた場所にりすのほっぺジャムを作る建物があり、活動がいろいろ広がって素敵だなあと思いました。重度の利用者さんを焦らせる事なく気長に待つスタッフの方に頭が下がる思いでした。在宅ではなく、事業所に通える喜びをお家の方は感じておられることと思います。ジャムの試食おいしかったです。

○はじめてホームを見せていただきました。利用者さんがとても利用しやすい雰囲気で素敵でした。

○ただ作業を行うだけでなく、材料を取りに行く過程から行って見え、支援する立場から見てもとても興味深く見学させていただきました。ハード面を整えるだけでなく、ソフト面として利用される方へ寄り添える支援を行って見えることが伝わってきました。

○重度の方も自分の役割をきちんと持って見えるので自信にあふれた顔の方がたくさん見えたのが印象的でした。

○職員の方が皆さんに親身になって寄り添って見える姿が大変印象に残りました。

第二いぶき　森 洋三

シリーズ

私と息子といぶきと

真と私、25年を振り返って

真は、平成2年9月22日に母親の郷里（福井県勝山市）で生まれました。私は分娩室に入って出産に立ち会いました。真っ白な透けるような肌に驚いたことを今でも鮮明に覚えています。

真の異常に気付いたのは言葉の遅れによってでした。3歳か4歳ころだったと思います。MRIの脳検査を受け先天的な異常があることが明らかになったときは大きなショックを受けると同時に先行きの不安が重たくのしかかってきました。しかし母親は、それ以前から異常に気づいていてその後のこともある程度見通していたようでした。

真は静かな子で大きな声を出すことはほとんどありませんでした。幼児期は、一人で砂をいじっているのが好きでそれを傍らで見つめて過ごすことが多くありました。お姉ちゃんとの関わりのなかではお互いをいたわりあい、優しい面が見られました。

保育所は、最初大阪で入園しましたが私の仕事の関係で途中から岐阜に引っ越し、早田保育所に入園しました。小学校は島小学校の特殊、中学校からは中濃養護学校に入学しました。養護学校卒業後はいぶきでお世話になって今に至っています。多くの方に支えられ、今があること感謝いたします。

2011年末に母親が病気で他界、2012年末には私の転職、再婚などが重なり真の落ち込みをカバーしてあげることもできず本当に申し訳なく思うと同時に何とか生きていく力を身に着けてほしいと願いながら過ごしてまいりました。

いぶき、グループホームでお世話になることで自閉傾向も緩和され、穏やかな表情になってきました。トイレ、食事、身の回りのことも指導いただき自分の自信にもなっていると感じます。「（真が）一生懸命働いている」という職員さんの声に励まされる毎日です。これからも笑顔を絶やさないように生活していきたいです。

水上　一

東北被災地視察を終えて

「あの日から」５年が経ちました。

２０１１年３月14日(金)午後２時46分東北地方を襲った東日本大震災は未曾有の被害をもたらしました。今もなお数百人の方が行方不明となっております。

私は自分自身の目、肌で、空気を感じたくて今回きょうされん東海ブロック被災地視察研修に参加してきました。岐阜、愛知の施設職員総勢20名で行ってきました。

社会福祉法人「洗心会」のぞみ福祉作業所の施設長の畠山さんをはじめ職員の森さん２名で事細かく案内していただきました。南三陸町までバスで移動し、目に飛び込んできたのは海沿いにそびえる20メートル以上もある土がかさ上げされた所でした。のぞみ福祉作業所は海抜16メートル程度の高台にあり避難所にも指定されていたにも関わらず１階の天井付近まで津波が押し寄せてきました。津波で職員の目の前で利用者さんが２名亡くなりました。さぞ、悔しい、つらい思いがあったと思います。「想定外」の津波は町、人々をのみこみ壊滅的なダメージをもたらしました。

家屋はもちろん道路も何もかもが失われました。現在ダンプとショベルカーが行き来している現場をみて私は驚きと同時に悲しい気持ちになり、その場所から逃げ出したい気持ちでした。

被災者である後藤一磨さんが被災地を案内してくれました。当時の様子を語ってくれました。印象に残った言葉は「地震や津波は自然の営みの一つである」、「人間も自然の一部である」でした。この言葉には考えさせられました。

私たちの住む岐阜でもいつ起きるか分からない地震。仲間の安全を最優先して日頃の防災意識を高めていきたいです。そして、「あの日を忘れない」の言葉を職員にも伝え、大震災を風化させないようにしていきたいです。

いぶき　古田洋右

（6）2016年 7月20日発行　いぶき福祉会後援会 1999年11月29日低料第3種郵便物認可（4,7,10,1月の20日発行）第187号

平成27年度決算報告

社会福祉法人いぶき福祉会
（単位：円）

貸借対照表（平成28年3月31日現在）

勘定科目		借方	勘定科目		貸方
流動資産		183,833,883	流動負債		17,966,235
	普通預金	65,667,466		事業未払金	10,187,051
	現金	231,025		預り金	3,411
	事業未収金	105,799,817		職員預り金	3,959,773
	商品・製品	7,962,668		1年以内返済予定設備資金借入金	3,816,000
	仕掛品	339,600	固定負債		60,905,514
	原材料	1,493,539		設備資金借入金	34,662,000
	前払金	2,339,768		退職給付引当金	26,243,514
固定資産		669,692,126	負債の部合計		78,871,749
	基本財産	449,324,934	基本金		182,345,144
	その他の固定資産	220,367,192	国庫補助金等特別積立金		267,676,737
			その他の積立金		124,496,830
			次期繰越活動収支差額		200,135,549
			純資産の部合計		774,654,260
資産の部合計		853,526,009	負債及び純資産の部合計		853,526,009

資金収支計算書（平成27年4月1日～平成28年3月31日）

勘定科目		決算額
事業活動収支	事業活動収入計	617,082,450
	事業活動支出計	566,302,893
	事業活動資金収支差額	50,779,557
施設整備等収支	施設整備等収入計	0
	施設整備等支出計	5,995,640
	施設整備等資金収支差額	−5,995,640
その他の活動収支	その他の活動収入計	20,337,680
	その他の活動支出計	41,417,287
	その他の活動資金収支差額	−21,079,607
当期資金収支差額合計		23,704,310

前期末支払資金残高	136,183,531
当期末支払資金残高	159,887,841

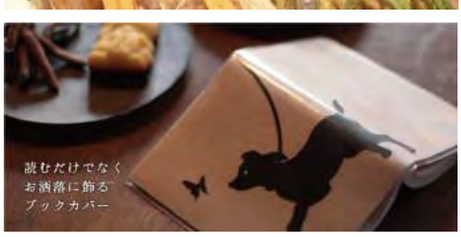
事業活動計算書（平成27年4月1日～平成28年3月31日）

勘定科目		決算額
サービス活動増減の部	サービス活動収益計	608,261,305
	サービス活動費用計	593,619,300
	サービス活動増減差額	14,642,005
サービス活動外増減の部	サービス活動外収益計	8,821,145
	サービス活動外費用計	1,331,333
	サービス活動外増減差額	7,489,812
経常増減差額		22,131,817
特別増減の部	特別収益計	20,968,475
	特別費用計	21,211,326
	特別増減差額	−242,851
当期活動増減差額		21,888,966
繰越活動増減差額の部	前期繰越活動増減差額	195,579,845
	当期末繰越活動増減差額	217,468,811
	その他の積立金取崩額	0
	その他の積立金積立額	17,333,262
	次期繰越活動増減差額	200,135,549

ホームページをリニューアルしました！

IBUKI Style

RENEWAL



新しくなったネットショップでは、
いぶきの全商品がご購入いただけます。

ネットショップ Ibuki style
http://www.ibukistyle.com

いぶきスタイル　検索

いぶきふれあいまつりを開催しました。

5月22日（日）に第25回いぶきふれあいまつりが島小学校・島公民館にて開催されました。朝から晴天に恵まれ大勢の人が訪れ、にぎやかなまつりとなりました。

ステージでは済美高校さんのファンファーレでまつりがはじまり、毎年参加していただいている各団体の皆様に、音楽や踊りを披露していただきました。仲間のみんなはこの日に向けて練習を重ねてきた踊りを披露し、また日ごろの仕事の成果を発表して、各自の役割を果たした顔はとっても生き生きとして、とっても満足気でした。

今年も、焼きそばやカレーなどには長い列ができて、模擬店も大盛況でした。模擬店をはじめ、くじやゲーム等の会場企画をご来場いただいた皆様と楽しむことができました。

まつりの運営にあたりまして、本年もたくさんの方々のご協力を頂きました。これからもまつりをより良いものにしていこうと思います。今後ともよろしくお願い致します。

まつりを支えるたくさんのボランティアさんありがとうございます

私は当日、ボランティア担当をさせていただき、その視点からまつりのことを書きたいと思います。毎年、１００人以上のボランティアの方がいぶきまつりに来てくれます。高校生から大学生、社会人と幅広く、まつりのサポートをしてくれます。ボランティアの主な内容としては交通案内・整理、模擬店の手伝い、仲間の付き添いとなります。交通案内・整理は来場されるお客様の車両を駐車場まで誘導します。今年は日差しが強く、暑く立ちっぱなしの大変な環境下でしたが安全かつスムーズにお客様が来場できるように交通整理をしていただきました。模擬店の手伝いでは商品だしや会計などを行います。大きな声でお客様

を呼び込んだり、お待たせしないように手際よく商品を提供したりする姿が見られました。仲間と一緒に商品を持って販売に回り、笑顔で接客をしてくれました。仲間の付き添いとは、仲間が楽しめるようにサポートすることです。一緒にカレーや焼きそばを囲んで食べる姿。

踊りのステージ発表で一緒にマラカスを振りながら楽しむ姿。ゲームをして景品をとれたことを一緒に喜ぶ姿、いろいろな姿を見ることができました。どの姿も仲間だけではなく、ボランティアの方も一緒に笑顔になり、まつりを〝共に〟楽しめていたように思えました。25年間、毎年開催され続けてきたいぶきまつりですが、ボランティアの方のご協力なくしては決して成り立ちません。地域の人と障がいのある仲間をつなぐ大きな架け橋となっています。これからまつりを30年、40年と続けていくためにも、またお力添えしていただけると嬉しいです。今年のまつりも暑く辛い中でしたが、ボランティアをして下さり本当にありがとうございました。

第二いぶき　浅野裕美

第25回 いぶきふれあいまつり

いぶき 仲間のすがた 後藤鉄也さん

後藤鉄也さんと創るいぶきでの生活

後藤鉄也さんは昭和38年9月16日生まれの53歳です。

後藤さんがいぶきに入ったのは、1984年。いぶき共同作業所の1期生です。いぶきにはいって32年になります。長いいぶきの変遷とともに、後藤さんも様々な人生をあゆんできています。

後藤さんは1995年に第一作業室所属となり、ふくろのひも結びの仕事を中心に下請け作業をしていました。あまり手先が器用とは言えない後藤さんですが、毎日の積み重ねで、袋を100枚以上も作ることもあったそうです。

しかしながら、後藤さんは周りの環境に影響を受けやすく、集中力が持続しづらい障害がありました。そのため、当時から仲間や職員から、仕事や生活に対して様々な注意を受けていたことが分かりました。

注意を受けると、気持ちが落ちつかなくなり、さらにミスを重ねる…といった悪循環が続いていたそうです。

後藤さんは仕事や生活の中で自分も認められたい、たくさんの仕事に囲まれて、毎日忙しいけれども充実した毎日を送りたい、という願いがあるようでした。しかし、毎日自分ではどうしようもできないけれど、同じミスを重ねてしまう、といった悩みを持ちながらの生活でした。

しかし、2014年から後藤さんは、袋の仕事だけでなく、三年番茶のお茶の仕事に関わる「ファーム」チームに所属を異動することになりました。お茶をつくるために葉っぱちぎりをする、様々な農作業に関わる、農地で出会う様々な人に声をかけ仲良くなる。そんな今までの「仕事の規格」に自分を合わせる仕事ではなく、後藤さんが後藤さんらしくいることがもっとも大切であるという、今の所属チームに共通する思いをそこで大きくすることが出来ました。「ファーム」は体力的な負担が大きく、その後部屋を異動することになりましたが、今でも、お茶の仕事を継続しています。下請け作業と比べると、小さなことへの叱責や注意されること減り、自信を持って仕事に取り組める場面が増えました。また、農作業の中での軽作業をお願いしたりすることで、〝頼りになる後藤さん〟と

いう姿も発見することが出来ました。様々な仕事に関わることで、自信を増して、様々なことにチャレンジしてみたいという気持ちを引き出すことができました。

自分が生活の主人公であることが人生の中でどれだけ大切であるか、部屋での活動や仕事を見つめることでわかってきたことが多くありました。

また、後藤さんはいぶきのホームで生活をしています。いぶきのなかで、自分らしく、生活の主人公になれるよう、日中の施設とホームで連携を取りながら、今後も後藤さんの「いぶきでよかったー！うれしー！」という声が聞けるよう、共に生活を創っていければと思います。

いぶき　加藤 亮太

仲間のすがたを読んで

いぶき　三輪忠良

私は昨年度からグループホームの担当をしています。後藤鉄也さんとは、いぶきでの仕事が終わってホームに帰ってきてからや、いぶきが休みの日に関わることが多いです。後藤さんの住んでいるグループホームの宿直に入ると、後藤さんはいつも口癖のように「いぶきでよかった！」「仕事がいっぱいある！仕事に行きたい！」と話しています。また、田植えの時期には作業を楽しみに待ち望んでいて、何カ月も前からホームで田植えの練習をしていました。この後藤さんの仕事に対する意欲は、レポートにも書かれているように、自信を持って仕事に取り組める場面が増えたからだと思います。いぶきの作業所ができた当初はあまり仕事がなかった時期もあったようで、後藤さんは今仕事があるということに喜びを感じているようです。お茶や農作業、ハローバックの仕事は自分の仕事であるという責任感を持って取り組んでいることが伝わってきます。同じ作業所で働いている仲間のことも大切に思っていて、もし自分が違う作業所に行くことになったら、他の仲間も連れて一緒に行きたいと話していました。

グループホームでの後藤さんの楽しみは、大好きなコーヒーを飲みながらテレビを見ることです。スポーツ番組を見ることが好きで、野球中継やサッカー中継を見ながら熱狂しています。休日には職員と買物に出かけたり、外食に行ったりすることを楽しみにしています。買物に行くと大好きなコーヒーとコッペパンを必ず買います。また、月に1回、移動支援を利用してミスタードーナッツに行くことも後藤さんの楽しみの1つです。秋にはホーム旅行を予定していて、今から待ちきれない様子でした。

そんな後藤さんですが、今年の6月に腸閉塞で緊急入院しました。入院の際には弟さん夫婦にも来ていただきました。鼻から腸までチューブを通して腸の内容物を排出しつつ、点滴による栄養補給を行いながら絶飲食で腸閉塞の回復を待ちました。入院中、作業所の仲間からメッセージが書かれた色紙を届けてもらったり、同じグループホームの仲間や世話人さんがお見舞いに来てくれたりと、後藤さんがいかにたくさんの人に愛されているかを感じました。10日間の入院の末、無事元気に退院することができました。私がお見舞いに行くたびに後藤さんは「いぶきに行きたい！」「田植えがしたい！」と話していました。後藤さんにとって、いぶきの仕事は楽しみであり、生きがいであるということを改めて感じました。

レポートにも書かれているように、作業所での仕事もグループホームでの生活も、後藤さんにとって充実した毎日を過ごせるようにするためには、職員間で連携をとって支援していくことが大切だと思いました。グループホームとしては、これからもできるだけ後藤さんの願いに寄り添い、「自分でつくる暮らし」を目指して支援していこうと思います。

座談会
親亡き後について②

※今回は4回シリーズの2回目です。

出席者
林：法人副理事長（進行）
前川：父親の会世話人
大野：いぶき保護者会会長
土田：第二いぶき保護者会会長
池田：西部事業部長

林　本当は今の若いお母さんが、住まいづくりの運動を頑張ってくれないといけないと思います。

土田　若い親もそうった心配はしてみえるですよね。心配はしてみえるのだけど、どうしたらいいかが分からないと思うのです。

前川　どういう方向でみんなの気持ちを一つにするのか・・・。様々だとは思うけど。障害のレベルというか障害特性などいろいろ違いますから、大変難しい事とは思うのだけれど。

大野　ちょっと自覚が薄い人もいるかもしれないから、どうやって盛り上げるかというのが難しいですね。

土田　現障害者を取り巻く現状とかは知らないよね。

大野　知らないと思う。安心して入ってきている。

土田　そう思う。

林　支援度の高い仲間も多いですね。

土田　そうですね。やっぱり、本当にそういった方が多いので、私も聞いているとお母さん達が今どこまで耐えられるのかなという感じ。お子さんの首絞めたくなるというような精神的に追い詰められている方の話をよく聞きます。そうかと言っていぶきがどこまで支えていけるのかというのが心配。もうお手上げ状態に至るところもあるのではないかと心配している。

前川　僕達が聞くとどんなに障害の重い子どもでも入れるという原点から運動してきたから。

土田　そういった目標だからね。でもまだ受けられるのですか？

林　ジレンマがあって、ホームをつくるとなると日中の部分を大きくしないとホームを支えられないのです。

土田　あー…やっぱりそういう事か…

林　今、いぶきの利用所は150人。150人で6つか7つのホームを運営している。

池田　ひとつのホームをやっていくには、最低でも20名の通所が必要くらいかなという感じです。

林　財政的にね。そうすると、ホームをつくるという事は、その基礎部分、通所の部分を拡げないとホームは成り立たないのです。

土田　そしたらまた、新しい人を受けていくということになるのですよね？

林　ホームをつくっていったのだけど、それに比例して今150人くらい利用者がいる。そして職員が130人くらい。びっくりですね。

土田　そういうことか…

池田　ジレンマとして、先程林が説明したように、土台が拡がると、すなわち通所人数が増えないと当然ホームが成り立たないような仕組みなのですが、その拡がった人達もいずれそのホームを希望するとなると、全体的にどんどん大きくなる。変な話だが、ホームを利用さてれみえる方が、入れ替わっていくタイミングまでその拡大が続くといったような流れです。

前川　島を増やしていかない限りはどんどん大きな島になっていきますね。

池田　そうですね。

林　頭でっかちだと倒れてしまうから。他施

設では、ホームをひとつつくったが、ふたつ目はやっぱり難しいところもある。

前川　たとえ、土地はいっぱいあってもね。

林　通所部分を増やさないとできない。そういった仕組みなのです。今、通所している方が全員グループホームに入るということは計算上から行くと二次曲線のような意味で無理なのです。

大野　親としては、いつかはグループホームに入れたいと皆さん思ってはいるのだけど、グループホームを辞めた方は居ないですから。

前川　それはやっぱり居ないでしょう。

林　空くと言う事は亡くなるということ。変な話、高齢者施設は入れ替わるから。毎年くらい。でも障害の場合は長いから。まだ緒に就いたばかりだから。

池田　いぶきは利用者の4分の1くらい入っています。

前川　もう4分の1が入っているか？多いな。

林　地域で暮らすグループホームといっても第二いぶきとパストラルは併設施設になっている。安全が保障できるにはそういうシステムしかできない。ただ、ある程度自立度の高い人はレオパレスみたいなアパートでもできるのかなと。

土田　自立度の高い人も見えるのですか

林　親が亡くなったひとが何人かみえます。

土田　そういう方がみえるのだったら、そういう考えも出来るのですね。

林　それもやっていかないと、結局。そういう所はスプリンクラーつけなくていいのです。支援区分4以上の方が80％以上いるとスプリンクラーが必須なのです。

池田　いぶきはさぎやまホームだけはないです。あそこは障害程度区分が4以上の方が半分超えていないので消防法にはひっかからない。

前川　僕らの娘は意思表示が基本的に何もできなくて、身近に生活している親にしか何がしたいか分からない。唯一親以外に分かってくれるのは職員しかいない。こんなのどこでもいいから入れと言ったって到底無理。できるだけ長く家で意思表示を見つめながら世話してやりたいけど、それでも親が駄目になったという時に今度は入るところが無かったら大変なことになってしまうから、無理してでも入れてしまおうかということになってくる。そういう選択も必要になってくる年齢なのかなと思っている。

林　「グループホームに入りたいですか？」とアンケートを取ると、「4～5年後に考えます」と20年言い続けて、具合が悪くなると「明日から入れてください」と言うことがある。そういったことは結構あるのですよ。急にたずねて来て「明日から入れてください」と。

大野　みえますよね。

林　気が張っているうちは良いのだけど。調子悪くなって体力的にも精神的にも弱ってくると「もう明日からみられない」となってしまう。

前川　僕なんかも、腰痛が再発してしまったら、もうみられない。娘を抱えないといけない生活。絶対抱えないといけない生活ですから、腰が痛くなってしまったらもう絶対無理。抱えられない。アウトですわ。

林　そういう時にいぶきは今までは何とかしてきた。「いやいぶきでは無理だ、どこか他へ行ってください」ということはなかった。

土田　パストラルができた時に、みなさん軽度の人達が希望されるかなと思ったら、やっぱりそうではない。重度の人が希望しましたね。

大野　パストラルが第二いぶきに近かったいうこともあると思う。

土田　子どもを入れる事を考えていないと言われる方もずっと居るのだけど、前川さんのように重度の子の親さんはやはり早くからパストラルにお願いしたほうがいいと決断された人が多かったと思う。私が親しい方も、入られたので、やっぱり良

かったとみなさん喜んでみえる。昼間は通所の方に行けるし、夜はパストラルで世話していただけるし、すごく喜んでみえる。また、この前までは親がこの子より一日長生きしたいとか、一緒に死にたいとかそういう親亡き後のことを思うと、無理心中みたいなことをみんな考えていたのだけれど、「あそこができて入れてもらえたおかげで、もう私が死んでもあの子はあの子の人生はいぶきの職員に可愛がってもらえて、あそこで生きていけると思うと本当に安心した」という事を言ってくださるのです。私はその言葉を聞いて、寄付や募金活動して、なんかそうやって喜んでくださったら良かったねと思って。ホームの人達は、本当に喜んで、あの時入らせてもらえて良かったわ、という声を良く聞きますよね。

大野　ホームに入った人たちも、今度つくるときに是非協力していただきたいですね。

林　パストラルができたことによって、重度の方を単に受け入れるということではなくて、重度の方もいきいきと生活しているのを親が見て、「あ、うちの子はホームで暮らすのは絶対に無理だと思ったが、いけるんだ」とみんなが思った事が大きいと思うのです。それまでは、悲愴な覚悟で死ぬまで…

大野　だから5棟をつくってほしかったのだけど。5棟があればもっとみんな入れたのに。

林　今理事会の方でも、残りの2棟の計画をしています。

大野　早くして。もう何年も言っている。

林　終わりのない仕事なので…。

林　ホームに長く入っている人は帰省ができなくなってきている。正月もお盆も365日。家庭がないか、年寄りとか、どんどん、正月やお盆に帰るところが無い人が増えてきている。

土田　ホームに365日いると年金でやっていけますか。

大野　グループホームのお金は一緒だよ。土日帰る人も365日居る人も一緒の金額です。

林　学校の給食代と一緒ですね。食べなくても1カ月分かかる。

大野　そうなんです。食べても食べなくても一緒の金額を払っている。ちょっと不満ですけど。

土田　そうですか。結局私達が亡くなって後も、年金でなんとかやっていけるような仕組みではありますか？

大野　今のところね。

土田　重度の子の場合はなんとかやっていけるのではないかと、みんな言っているけれど、軽度の子はどうですか。

前川　生きていくだけはね。

大野　でも、余裕はない。

前川　僕達、父親の方は、後見人制度をそこに入れて、親が亡くなっても財政的にはある程度フォローできるような体制をそこに作っておきたいという気持ちがある。

土田　成年後見人の制度をそこに入れて？

前川　そして自分の資産もある程度そこに入れ込んで、末永く面倒を見てもらえるような体制を取れる方は取っていくと選択が出てくる。その情報がもっと欲しいなと今思う。

林　今、たくさん研修会やっていますね。

前川　出てきているのが法人後見制度。いぶきは取り組めないけど、やっぱり子どもの性格が分かるようなところが法人後見としてやってくれれば、中には喜んでお金を入れますよと言う方もみえますからね。

林　つくらなければいけないね、組織を。法人を、NPO法人でもいいから。社会的信用度の高い組織を。

大野　そうだよ、個人ではね。

土田　そういうことなの。だって、騙されたという事件もあってね。

大野　いろんなね。

林　簡単に騙せてしまう。

前川　そりゃ騙せる。意思表示だれもできないもん。

土田　財産は無くても、その年金だけでやっていけるという状況ではあるのですね。今のと

ころ。

林　これから介護保険の問題が非常に大きい。国は介護保険優先が原則という。本人が何も言えなかったら無条件で65歳の誕生日に「はい、あなた介護保険事業所に引っ越しですよ」と言われる。国はお金が半分で済むのだから。

土田　えー困っちゃうね。やだー。

前川　どこか裁判がおこっているよね。

林　はい、起こっています。広島の方が。1割負担が増えるから。今までなかったのがある日突然1割になると払えない。

前川　そんな矛盾したことはないな。

林　国の勝手ではないか。今まで原則無料で暮らしていたのに1割くれと言われる。

土田　うーん、厳しいね。

林　皆さんも40歳以上で払われるでしょ。

前川、土田　払っています。

林　と言う事は利用するということ。払っているという事は。65歳以上は介護保険を利用すると。

林　僕らは65歳問題と言っているのだけど、看取りまで面倒みますというのだけど、介護保険になってしまう。今、国が言っているのは障害者施設に全部介護保険事業所の認定を取れなんて言っている。

前川　介護保険の事業所として？

林　そうですね、それを国が提唱していて、これから法律をつくっていくのだけど。なので、高齢障害者のことをそこで解決しようとしている。お金がかかるからずっと障害者施策使っていくのは困る。それで介護保険の事業所認可を取らせる。だから政治なのです。

前川　本当にやっぱり政治の力は大きいな。

土田　どんどん制度が変わって、私達が入った頃からどれだけ制度が変わったのでしょうか。もう恐ろしいくらい変わって、運営が苦しくなった施設もいっぱいあるのですよね。

林　日割り単価になって大変ですよ。

前川　介護施設も小規模はどんどんつぶれていますしね。

林　やはり、民間がどんどん入ってきて。

土田　児童のデイサービスもびっくりするのですが。専門家が居ないようなところがどんどん増えていますね。

林　どんどん増えている。株式会社がやっているから。規制緩和というのはそういうことなのです。法律化され、その後に、法律を変えると介護保険みたいに撤退するのですよ。そこには福祉の不毛地帯が残る。

土田　そうするとまたどうなるのですか？またいぶきに押し寄せてきて？

林　うちは「じゃあ辞める」とは言えないから。だからそういう所の利用がすごく多くて。

前川　こういう施設に効率化とか何かを求めることが自体おかしい。

林　事業所は効率だけを考えると支援度の軽い子を契約で選ぶ。「お宅みたいな子はうちではちょっと無理です」といって。

土田　それを私たちは感じるのです。うちの子達みたいな子とか、自閉の強い子とかは、本当に肌で感じるのです。そこはやっぱり、いぶきが理念をしっかり持ってやって下さって、私達も10年以上お世話になって、本当にいぶきがやっぱり大切にやってくださっているし、気にとめていてくれているし。本当に多種多様な事業を展開し、それにみんな対応してやってくださっているのは、本当に頭が下がるのです。そういうことで私達も本当はいぶきがいいのです。このままお世話になりたいのです。これからもそういうふうに思っているので、手のかかる子もいっぱいいますが、なんとか次のホームをつくっていただきたい。

林　とりあえず、ホームでつなげていかなければ仕方ない。しかし、現在のグループホームや福祉ホーム、在宅生活に代わる新しい「すまい」の形を模索していかなければなれないと考えています。

後援会員への新規加入・更新をよろしくお願い致します

［振込先］　郵便振替　００８４０＝３＝９１１４６
　　加入者名 いぶき福祉会後援会
［年会費］　一般会員　　一口　　2,000円
　　団体会員　　一口　　10,000円
［お問合わせ］いぶき福祉会後援会事務局
　　ＴＥＬ ０５８-２３３-７４４５　ＦＡＸ ０５８-２３２-９１４０
　　E-Mail ibuki@alto.ocn.ne.jp（タイトルに後援会員と入れて下さい）

オンラインでの入金もできるようになりました。

下記のアドレスからご利用いただけます。
　いぶき福祉会canpan決済　http://kessai.canpan.info/org/ibuki/

後援会への入会はＪＲ岐阜駅の「ねこの約束」でも手続きしていただけます

編集後記

今号では、いぶきの法人化前から長く続いている5月のいぶきまつり、ここ数年盛況を取り戻している7月の後援会総会の様子を皆様にお伝えできることに、編集に携わっている者として大きな喜びを感じています。と同時に毎号のことですが、長年にわたって後援会費や多額の寄付を寄せて下さる多くの 方々への多大の感謝の気持ちがわいてきます。『夢よもっとひろがれ』を読んで下さっている皆様、本当にありがとうございます。いぶき福祉会創設時からずっと中心となってこられた親さんが主体の座談会は、今号分でほぼ予定の半分でこれからいよいよ佳境に入っていきますし、職員の実践とこれへのコメントも仲間の充実した暮らしと支え手の職員の熱意が溢れた更に内容豊かなものになってきたと思っております。

なお今号をもって私の編集長は終了し、次号からは、長くいぶきで理事・所長を務められこれからも常任理事としての活躍が期待されている林守男さんが新編集長となります。新編集長の下での新たな誌面にご期待ください。

編集委員長　竹内章郎